

伝道上からみた仏教教理の臨床的考察（2）

——ガン患者竹下昭寿氏の場合——

皆川廣義

めに楽しむことが人生の目的だと信じている。

仏教の教理について、四諦説では仏教は生死の苦惱からの解脱道であり、生死の苦惱の原因は渴愛にあり、この渴愛を滅することによつて、生死の苦惱より解脱することができる

と説示している。⁽¹⁾

渴愛は、のどが渴いて水を求めるような、強い貪りの心・

妄執のこととそれは人間の心の中にある無明により生じる。

無明は人間の真実が縁起なることを知らないで、實有なるものと妄分別し、それによつて我なる主体をたて、我に執した生き方を生じるである。

ところが現代人のように、我を中心とした生き方をしていものは、我見を捨てよといふこの仏教の教えはなかなか実践しにくいものである。自分の人生は自分のためにあると、

何ら疑うことのない現代人は、自分のために働き、自分のた

ただ、死のみがそのような現代人の生き方を無条件にふみにじつてしまふ不条理なものである。そして、どんなに平和で豊かな時代に生きる人間でも、自己の死は不可避である。現代人も、自己の死に直面したとき始めて、生死の苦惱からの解脱を説く仏教に耳をかたむけざるを得ないのである。そのような意味で、現代においてガンなどに冒された末期患者達は、仏教の門に最も近い人々と考えることができる。

このたびは、仏教信者で三十歳のとき悪性のガンにかかり亡くなつた竹下昭寿氏の生死の苦惱からの解脱道を、彼の残された遺書と兄・竹下哲氏の臨床日記⁽²⁾をふまえて考察して行きたい。

二

医の高原先生より、病気が胃ガンで致命的な病状であることを見告された。

主治医が、竹下昭寿氏に死の宣告ができた背景には彼や彼の家庭が熱心な浄土真宗の信仰を有しており、宣告の苦悩に対応する力があると判断したからであり、主治医も同じ信仰者であった。

兄、竹下哲氏の日記では主治医の宣告の話が終ったとき、昭寿氏は「これで落ち着きました。」と静かに述べたと記している。そこで哲氏が「遅かれ早かれぼくたちも行くからね。人生の長い短いはどうでもいい。慈悲に会うということが大切だもんね。」と言うと「うん・うん」とうなずき、「病苦でどんな死に方をするかわからんけど、いのちある限り生かせて頂く」と語った。

竹下昭寿氏は、主治医からの死の宣告を遺書の中で、次のように受けとめている。

久しぶりに字を書く。なんだかうまく書けないな。「死の宣告」今までに何回も聞き馴れたことばだが、自分自身が本物の「死の宣告」を聞かされようとは。今日は朝から素晴らしい春日和だった。朝は食欲がなかつたけれど、お昼頃から気分は良い方だった。午後一時間ばかり眼つてちょうど目が覚めたとき高原先生が往診された。一昨日の往診の時、なにか不安なことはないが、包み隠さず体裁ぶらずに、その不安を聞くから——と言いおいて帰られたので、今日は病状がちつとも快方に向わない、逆に

退院当時より疲労度は増していくようだと言った。先生は、待つていたように私の真の病気がなんであるかを明らかにされた。「胃ガン」——信じられないような病名。致命的な病状の進み。すべてはもはや手遅れだったのだ。それとは知らず日が経つにつれて焦っていた私。母や兄たちが入院当時から深刻な表情をしていたのを、むしろ不思議に思っていたのだ。

なんにも知らなかつたのは私だけだったのだ。みんなは私の姿を見ながら深く悲しんでいて下さつたのだ。

先生から「死の宣告」を聞かされた時はなんだかぼつとしていた。興奮状態だったのだろう。

あと何日のいのちがあるかわからない。三十年の宿業が残り少なくなっているということだけ。明日までかも知れないのだ。「今日一日ありがたく大切に」——高原先生のことばが、実感となつてひびいてくる。これからさきどんな病苦にのたうちまわるかも知れない。果すべき宿業は自分で果してこの世を去る以外にないので。しかしその宿業の果には、親鸞聖人や唯円坊が渡つていられるところがあるので。そして十五年前に往つておられるお父さんも。

この世の人間の愛情のなんと濃やかな中に自分は生かされていしたことだろう。三十年間の愛の火の中で、しかもなによりも仏縁に恵まれていたことの良かつたこと。すべては大慈悲の唯中に、今まで今も生がされているのだ。

夜十時半、疲れてまとまらないが今夜も休ませて頂こう。
「ただ念佛して」

アメリカの精神医キュー・ブラー・ロスは、末期患者の死の

受容に至る過程に第一段階——否認・第二段階——怒り・第三段階——取り引き・第四段階——抑鬱⁽³⁾・第五段階——受容の五つの心理的パターンがあるとしている。

第一段階の否認は、診断の正しさを半ば知りながらあまりに衝撃が大きいため、それを受容できず否認している状態である。第二段階の怒りは、否認が維持できなくなると生じてくるもので、憤り・羨望・恨みなどの感情をもとなう。第三段階の取り引きは、神などと取り引きをして、もしかするとこの不可避の現実を、もう少し先に延ばすことができるかもしないと考へる。第四段階の抑鬱（準備的悲嘆）は、病気が進んで否認や怒りなどで対応できなくなり、喪失感に落ち入り、抑鬱状態になることである。第五段階の受容はこれまでの四つの段階に対し適切な看護がなされると、自分の運命について嘆きや悲しみもなくなり、ある程度静かな期待をもって、近づく自己の死を受容できるようになる。

このキーブラー・ロスの説く五つの死の受容への過程からみると竹下昭寿氏は、日頃の信仰生活の功徳から、否認・怒り・取り引き・抑鬱の四つの段階をふみ越えて、いきなり死の受容に入っていることが分かる。

最近、わが国で刊行されている多くの末期患者の手記などが、この五段階を七転八倒しながら通過する闘病記であるのを考えると、竹下昭寿氏の場合は特異な例といえる。

竹下昭寿氏は、死の宣告を受けて衝撃はうけるが、すぐ、自分の病気を知りながら心から看病してくれている家族の深い愛を感じている。そして「果すべき宿業は自分で果してこの世を去る以外にないのだ」という、浄土真宗の安心を信じ、親鸞聖人や父のいる浄土にまいらさせていただくのだと述べている。

そして、医師よりガンの宣告を受けた二日後の日記のなかで、次のとく宗教的な法悦を記している。

昨日は母と兄が高原先生から色紙に歌を書いて頂いてきた。それを立派な額に入れて壁にかけてもらう。

何もかも我一人のためなりき今日一日のいのちたふとし

ほんとに私にぴったりの歌だ。「我一人のため」——大慈悲の真

只中に抱かれて残り少ない業を果していけるこの身の幸福。
ほんとにこのまんまでお浄土に生まれさせてもらえると思えば、浄土真宗のありがたさがつくづくしみとおつてくる。

死の宣告を受けた翌日から出勤前に兄、竹下哲氏から『歎異抄』を少しづつ朗読してもらつており、それは亡くなる八日前に読み終っている。看病の母もこれを一緒に聴聞しており、彼には豊かな宗教的環境があつた。

『歎異抄』第九条「なごりおしくおもへども、娑婆の縁つきて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまひるべきなり。」の言葉に対して「みなさんからもよくして頂ければ頂くほどほんとになごりおしいこの世である。でも娑婆の縁がつ

きれば、そのまんまかの土にまいりさせていただけるのだから、こんな幸福なことがあらうか。この世でもあらん限りの愛情に包まれ、そして「ちからなくしてをはるとき」にも、また即座に攝取不捨の利益にあづけしたまうとは。」と述べている。

竹下昭寿氏の心境として注目すべきことは、死の宣告という自分のことだけで手いっぱいの状態にありながら、次のように親族への暖い思いやりを持っていることである。

お母さんも少しずつ明るさ、元気をとりもどして下さっているようだ。あとは兄ちゃんたち夫婦に、博之、鈴ちゃんと類まれな子供たちがいるのだもの、大丈夫。

食物を正しくして聞法一路の生活を送って下さい。それに大阪や西郷のおばさんたちもほんとに良い人だし。

兄ちゃんには、ほんとに心配ばかりかけて——中心になつて家の柱になつて事に当つて下さる姿。まさに愛の火が燃えるみた。それでも身体もだいぶ疲れていらっしゃるだろうな。ほんとに世界一の兄を持つた私の幸福。まさに心の師だったもの。それにつた子さんも誠実そのもの。ちつとも表面には出ず、蔭から誠意をこめて私につくして下さることのありがたさ。いい姉を持つてよかつた。どうかお母さんをよろしく。良い息子も二人もいるし、兄ちゃんも良い人生が送れますね。

また、婚約者のNさんに對しても深い思いやりを日記に述べている。

Nさん、ほんとに打撃を与えてすみませんね。あなたにとつて（とくに女性である）こんなひどいことはなかつたでしょ。それをよく今までつくして下さいましたね。ほんとうにありがとうございました。いいお母さんとまれにみる愛情深いあなたにご縁があつて、短くはあつたけれどいい思い出でした。どうかまた立直つて下さい。これを機にお念佛の世界にも縁がありますように。なんといおうと、結局ほんとうの幸福はお念佛する世界をめざした人生だけと私は思います。すばらしいお母さんを恵まれているあなただもの、きっとお母さんともどもお念佛を喜ぶ人生をひらいていらっしゃることと思つています。私もお淨土にいったら、あまたおわす仏さまたちの末席にはべらしてもらって、「神通方便をもて、まず有縁を度す」大事業の一翼をになわせてもらいましょう。

ほんとに地味ではあつたが、しみじみとした良い交際の思い出ばかりでしたね。雨の雲仙もよかつたし、矢上の普賢岳、岩屋山、時津の海水浴、たのしいことでした。所詮はこうなるこれまでのご縁でしかなかつたのですが、私の人生の終りの時期に美しい花を添えて下さいました。なにもかも恵まれすぎた私です。

あなたのこれから先の人生。いろいろ苦しいこともおありでしょう。「人生は苦なり」とお釈迦さまはおっしゃつてゐるのですから。でも苦しみを通じて、また喜びを通してしみじみと落ち着ける世界が恵まれてゐるのですからね。大丈夫ですよ。元気に、全力を挙げてこれから的人生に立向つていつて下さい。ほんとうのものを見つめながら——。

病氣見舞にきた菩提寺の住職が「心不転倒というのは、臨

終の時平静であるというのではない。死ぬまで人間なのだから、波風も立とう。ただ、どんなに波風が立つても海の底は平静なのだ。名残りおいしいというのがあたりまえ。名残りほしいというのは、今的生活がよいということだ。」と、話してくれたのを「ありがたいお話を下さった」といつて、彼は非常に喜んでいる。

また、主治医の高原先生も応診の折・次のような話をされ、彼は感銘している。「往生というのは、結局は出船のこと。早い出船もあれば遅い出船もある。めざすところは西の浄土。西の浄土とはよく言つたものだ。天国では落ち着かぬ。東では暑くるしい。すばらしい象徴ですね。仏さまは頭がいい。人間は量と長さばかり問題にしていて。金・いのち・うまいもの——すべて量と長さばかり。大事なことは方向がきまるうことだ。人生は一応五十年の契約。しかし、家主が不意に出て行つてくれということがある。その場合、田舎に自分の家がある者は、今までお世話になりありがとうと言つて出て行ける。」

亡くなる半月ほど前、兄、竹下哲氏は、日記のなかで次のような病床でのエピソードを記している。

四時半頃から、家族の者が昭寿をかこんでビールの乾盃。「お互に前途を祝して——」と昭寿が言ってビールを飲む。
「つめたくて、おいしか」

明るいふんいきが部屋いっぱいに溢れる。笑い声まで起ころ。どうしてこれが死の病人の床の風景であろうか。それは、死を超えた世界の風景である。この味は、人生五十年のモノサシでは計れない。人生五十年を超えた世界の味わいである。だからこそまた、人生五十年を力強く、たくましく歩いて行ける世界である。母が「あたしや、うれしか」と言つて、泣く。

竹下昭寿氏は、亡くなる八日前に彼の宗教的境地を示すよう、次の詩をつくっている。

白道を歩いていく

お母さんや兄ちゃんたちの

やるせなき愛情を総身に浴びて

それでもひとり白道を歩いていく

いつかその道がつきた時

そこにはお浄土が開けている

多くの仏さまたちが待つていて下さる

おおご苦労だったと如来さまが

抱きとつて下さろう

もうその時は仏の一員

病・衣・食・住の執着のないところ

無執着の世界「浄土」

そこでほんとうに大切なことだけを

無限にやらせて頂けるのだ

そして、竹下昭寿氏は死の宣告を受けてから二十三日後の四月十七日午前七時二十五分、家族に見守られながら、念仏を唱えて亡くなつていつた。それは、静かな安らかな往生であった。

この竹下昭寿氏の臨終の様子を兄、竹下哲氏は、次のことが日記に記している。

母と私、昭寿の手をしつかりと握りしめて、お念仏を唱える。

昭寿、いっしんに母の顔を見つめる。

窓の外から、うぐいすの声が聞こえてくる。

母が手をしつかり握りしめながら、

「このまんまよ。このまんまよ。もうすぐ楽にさせて頂けるのよね。父さんが待つとんなさるよ」と言つてお念仏する。

昭寿、母の顔を見つめながら手を組み合わせるような恰好をする。そして、かすかに、つぶやくように、「なむあみだぶつ」と唱える。しばらくして涙をほろりとこぼす。母がガーゼでていねいに拭きとつてやる。

次第に、呼吸、脈が衰え始める。そして、喘ぐような、大きな息を数回して、七時二十五分、とうとう最後の息を引取る。

がんばれと激励することもなく、しつかりしると力むこともない、静かな往生であった。両手離した、あるがままの、安らかな最後であった。

病室にきれいな花をたくさん飾つて、この美しい弟の死を莊嚴してやつた。

現在、わが国ではガンなどの末期患者に死の宣告が出来ず医療活動に大きな障害となつてゐるが、以上、考察した竹下昭寿氏の死の受容のあとかたは、この問題解決に一つの明かるいデータを示すものである。

竹下昭寿氏は、仏教の教えによりみごとに生死の苦悩を解脱して、安心と生きがいを得て、大らかに往生して行つたのである。これを可能にしたのは、彼の母が「考えてみれば、昭寿の赤ちゃんのときからようお寺にお詣りさせて頂いたものよ。三十年前からのお手まわし」ということが、今しみじみと分からせていただいた。今、花を咲かせて頂いたような気がする。」と語つているように、彼をとりまく宗教的環境と彼自身の無我行の実践である。彼の仏教信者としての生涯は、現代のわが国でも仏教教理が実践され、みごとに生死の苦悩からの解脱道を現成していることを示している。

註(1) 拙稿「伝道上からみた四諦説の臨床的考察」(『印仏研究』

(2) 第二十九号第一号二九二)

(3) 『妙好人集』竹下昭寿稿 筑摩書房

『死ぬ瞬間』キュー・ブラー・ロス著 読売新聞社